

ツンデレな妹とヤンデレな姉との日常

ロシア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

狂った姉と生意気な妹の二人・・・家族間でのトラブルは、意外な方向に・・・その先にあるのはバッドエンドかハッピーエンドか・・・

目次

ある1日の出来事くプロローグく

1

く第1話く姉の狂気 | 8

く第2話く妹の気持ち | 14

く第3話く春夜の秘密 | 19

く第4話く僕と家族 | 24

く第4・5話くこうなる前は | 31

ある1日の出来事〜プロローグ〜

僕の名前は明日見 綜壱（あすみ そういち）。至って普通の高校生だ。ただ一つ、うちの家族を除いては。

人物紹介でもしようか。

まず僕の家の家系図について話そう。僕の家は姉、僕、そして妹の3人家族だ。親がないのは後ほど話そう。

姉の名前は優子（ゆうこ）で、今は大学生。妹の名前は恋楓（れんか）で高校1年生だ

これだけなら普通の特筆すべき点はない普通の家族になるかもしれない。でも一つだけほかの家族では滅多にないであろう特徴がある。

それは…

僕の姉と妹の性格だ。

ー朝ー

恋楓「おい！起きろクソ兄貴！何時だと思ってるんだ！」

綜壺 「んあ… あと1日寝させて…」

恋楓 「いやそこは5分とかにしるやあ！」

妹のきつい蹴りが入る。最近キツクの切れ味良くなってきたな。

綜壺 「ぐふう！分かった！起きるから蹴るのはやめてくれ！」

恋楓 「分かってんなら最初から起きてよ… ったく…」

半開きの目をこすりながら学校に向かう準備をする。

リビングに向かうと、テーブルの上に朝ごはんにしては少し豪華な料理が置いてあった。

優子 「あ、そうちゃん！おはよう！」

綜壺 「ん… おはよ…」

優子 「あら、寝不足かしら？ちゃんと寝ないとダメよ？」

綜壺 「いいじゃん夜更かしくらい…」

優子 「ダメよ！そんなだらしのない生活送ってたら…」

綜壺 「だが断る」

優子 「分かっ た ？」

綜壺 「アツハイスママセン…」

優子 「分かればよろしい！」

何故そこでドヤ顔をするのか。

優子「ぱぱっと朝ごはん食べて早く学校行ってらっしゃい！」

綜壱「へいへい」

恋楓「ふふ… お姉ちゃんに怒られてやんの！」

綜壱「うるさいn優子」言葉には気をつけなさい恋楓ちゃん？」

恋楓「あ…ご…ごめんなさい…」

何故だろう…姉に何か言われた時だけ妹はしおらしくなるというか…素直になると
いうか…いつものような強気な態度とは真逆になった感じだ。なんでなんだろう…

朝食をとったあと…

綜壱「やべ！もうこんな時間かよ！行ってきます！」

優子「行ってらっしゃい！気を付けてね！」

恋楓「行ってきます…」

優子「行ってらっしゃい」

何故か恋楓が行ってきますと言った時だけ姉の声が暗くなった気がした…気のせい
か？

―学校―

春夜「昨日のアレ見た？」

綜壺「あー見た見た…ってなんのことだよ…」

春夜「あれって言ったらわかるだろ？普通」

綜壺「分かるわけないだろ… ラノベの主人公じゃないんだから…」

春夜「いやラノベの主人公って言ったら鈍感だろ！」

綜壺「知らんわそんなん！」

くだらない会話を交わしているこいつは十六夜 春夜（いぎよい しゅんや）ってやつで俺の昔からの親友、というか幼馴染ってやつだ。

春夜「そういやさ、お前ん家の姉ちゃんってさ…」

綜壺「うちの姉ちゃんはどうしたの？」

春夜「その… 言いくいんだけどさ…」

綜壺「なにになに？言って言って」

春夜「その… さ…」

春夜「乳そこそこでかくね？」

綜壺「は？」

春夜「いやだからね？たまにお前ん家の姉ちゃん見るけどさ、着てる服が無防備とい

うか胸に目が行くというか……」

綜壺「まあたしかに姉ちゃん外いく時の服も無防備そのものだしな」

春夜「だろ？」

春夜「やっぱ乳はでかい方がいいよn……」

言いかけたところでファイルのようなもので頭を叩かれた。

？「そんなこと言えんだから提出物とか全部終わってんだよなあ？」

春夜「げっ……長谷川先生……」

長谷川「今日の分しなかったら課題を上乗せするって言つたよな？」

春夜「えと……なんていうか……課題をやったんですけども……」

長谷川「やったんですけどなんだ？ん？」

春夜「うちで飼ってるヤギに食べられました！」

長谷川「ほう……そうか……それならしかたないな」

春夜「そうそう仕方ない仕方ない」

長谷川「じゃあこれ」

春夜「え？」

長谷川先生が春夜に渡したのはヤギに食われたと言っていた課題……をコピーした

紙だった。

長谷川「嘘をつくんだっいたらもつとマシな嘘をつけよ… てことでお前は今日居残り決定な」

春夜「クソっ！」

はあ… 平和だなあ…

その後は普通に授業を受け、昼食時間も普通に過ごし何事もなく終えて帰宅した。

―夜―

優子「ねえそうちゃん」

綜壺「なに？姉ちゃん」

優子「あなたの部屋掃除したらこんなものがあつただけ…」

姉の手には…髪の毛が一本乗っていた

優子「これ恋楓ちゃんの髪の毛じゃないよね？そうちゃんの制服についてただけど

…」

綜壺「さあ？春夜の髪の毛がついたのかも」

優子「でも春夜くんって髪の毛の色茶色だったわよね？」

確かに言われてみればそうだ。

優子「まさか…女の子の髪の毛じゃないでしょうね…？」

綜壺「それは知らないよ……」

優子「そう……なら別にいいんだけど……」

なんだろう……姉ちゃん怒ってる？

でもあまり気にならなかつたので深く考えようとはしなかつた。

なんだか今日は一段と眠い……今日はもう寝よう……

その日僕はいつもならありえないほど早く眠りについた。

第1話 姉の狂気

私は優子。

私には二つ下の弟がいる。

名前は綜壺っていうの。

私ねその弟のこと…

異常なほど愛してるの。

姉弟だつてことは分かつてるの。

でもね、

自分でもこの気持ちが抑えられないのよ♡

ー朝ー

優子「そうちゃんが起きてくるまでに朝ごはん作っておかなきゃ！」

今日も私はそうちゃんのために朝ごはんを作る。

優子「えーと…卵は…あ！あつた！」

私が出来た人間じゃないことは分かってる。

それで周りに迷惑をかけてしまってることも。

優子「よし！これで完成！」

いつものテーブルに作った朝食を置く。

そこでふとあることを思い出した。

優子「あつそうだ。」

優子「そうちゃんの朝食には特別なトッピングをしないとね♡」

私がそうちゃんのために愛情を込めて作ったオムレツ。

それにケチャップをかける。そして…

優子「えいっ！」

私は人差し指の先を包丁で切った。

そこから垂れてきた血をケチャップと混ぜる。

優子「これで私の愛が伝わるかな♡」

流石に切った部分を見られるのはまずい。

絆創膏を貼っておこう。

ちようど絆創膏を貼り終わった直後にそうちゃんが降りてきた。

優子「あ、そうちゃん！おはよう！」

綜壺「ん…おはよ…」

今日はいつにも増して元気がなさそうだ。

私がしっかり注意しないと。

優子「あら、夜更かしかしら？ちゃんと寝ないとダメよ？」

綜壺「いいじゃん夜更かしくらい…」

ホントは夜更かしぐらい自由にさせてあげたいけど。

優子「ダメよ！そんなだらしない生活送ってたら…」

綜壺「だが断る」

優子「分かった？」

少しだけきつく言ってみた。

綜壺「アツハイスママセン…」

うふふ…そう…あなたはそうやって私の言うことだけを聞いてればいいの。

そんなくだらない会話をしているうちに綜壺は朝食を食べ終わっていた。

良かった…ちゃんと残さずに食べてくれてる…

恋楓ちゃんは…またか…

恋楓ちゃんは昔からの好き嫌いが多かった。

嫌いな食べ物が出たらそうちゃんに無理矢理食べさせようとするし、そうちゃんが抵

抗したら乱暴するし…

そのたびに思うの…

なんで？なんでそうちゃんをいじめるの？

やっぱり許せない…

そう思うようになってしまったのは1ヶ月前の出来事が原因だと思う。

1ヶ月前

恋楓「兄貴これ好きでしょ？あげる」

綜壱「またか恋楓… 全くお前の好き嫌いは治らないな… いい加減克服した方がいい

いんじゃないか？」

いつも通り恋楓ちゃんがそうちゃんに自分の嫌いな食べ物を渡そうとしてる。

恋楓「つべこべ言わずに貰え！クソ兄貴！」

恋楓ちゃんがそうちゃんを思いつき蹴った。

綜壱「痛っ！なんで蹴るんだ！」

恋楓「うっさい！」

もう一度蹴りを入れる。

2度目の蹴りが急所に当たってしまったのかそうちゃんが倒れたまま動かなくなっ

た。

恋楓「アニ…キ…？」

恋楓ちゃんも自分がした事の重大さに気づいたみたいだった。

恋楓「おい！兄貴！返事しろ！おい！」

その声で私は何が起きたのかを確認しにリビングへ向かった。

その光景を見た瞬間、私の中の何かが壊れた。

気付くと私は恋楓ちゃんを殴っていた。

その後のことはよく覚えていないが、途中聞こえた恋楓ちゃんのごめんなさいの声だけが耳に残っていた。

そうちゃんはその後目を覚ましていつも通りの生活に戻ることが出来た。

そうちゃんも恋楓ちゃんのことを笑って許していた。

でも私は思ったの。

恋楓ちゃんをなぜ許すの？

あんなことをしたひどい女なのに…

そこで私の中の何かが変わった。

守らなきや。

そうちゃんに害を加えるような奴は死んでしまえばいい。

ここからかもしれない。私が少しづつ狂っていったのは。

ここからかもしれない。私のそうちゃんへの愛が普通とは違うものになってしまっ
たのは。

第2話～妹の気持ち

私は恋楓。

明日見家の次女。

私には1つ上のお兄ちゃんと3つ上のお姉ちゃんがいる。

多分お兄ちゃんは知らないと思うけど私ね、

お兄ちゃんのこと大好きなの。

この前も私がお兄ちゃんのこと蹴ったのに笑って許してくれたよね。

そこでわかったの。私、やっぱりお兄ちゃんのことを好きだった。

あとね、もうひとつわかったことがあったの。それはね…

お姉ちゃんは危険だったこと。

あの時私聞いちゃったの。寝てるお兄ちゃんに向けて言ってた言葉を。

ーリビングー

私はいつも通り、嫌いな食べ物をお兄ちゃんに渡そうとしてた。

でもそこでお兄ちゃんがもらってくれなかったからイラッてきて。

お兄ちゃんを蹴っっちゃったの。思いつきりね。

でね、痛いとか言ってたのも無視してもう一回蹴ったらね、

お兄ちゃんが動かなくなったの。

その時はね、冗談だと思ってたの。

でもピクリとも動かないからわかったの。

どうしよう。またやっちゃったって。

そこで思ったの。なんで私お兄ちゃんにこんなことしか出来ないんだろうって。

恋楓「おい！兄貴！返事しろ！おい！」

その声に気付いたのか、上の階からお姉ちゃんが来た。

優子「どうしたの？恋楓……ちゃん……」

お姉ちゃんは倒れているお兄ちゃんと私を見て固まっていた。

優子「そう……ちゃん……？」

優子「え？」

優子「嘘だ……」

そういうと私の方を見て、

優子「許さない……」

恋楓「は… はい…」

そう言ってお姉ちゃんはお兄ちゃんを部屋に運んだ。

その後のことだ。

お姉ちゃんがいつまで経ってもお兄ちゃんの部屋から戻ってこなかったから、気になっってお兄ちゃんの部屋の前に向かったの。

そしたらね、

優子「そうちゃん、ごめんね。これからはあなたを傷つけさせはしないから。」

優子「私が守ってあげる。」

優子「あなたに傷をつける奴は私が… 私が同じ痛みを与えるから…」

その言葉を聞いてわかったの。

お姉ちゃんは壊れてしまったんだって。

私がお姉ちゃんを狂わせてしまったんだって。

12日後

その後お兄ちゃんは、お姉ちゃんの看病で無事に目を覚ました。

そのあとのお姉ちゃんはいつも通りのお姉ちゃんに見えた。

でも違った。

明らかにお兄ちゃんへの態度が違いすぎる。

異常なまでのスキンシップに、愛情表現。

そのどれもが他人から見れば引かれるであろうほどのものであった。

1週間ほどで収まったが、今のお姉ちゃんもやはりおかしい。

守らなきや。

お姉ちゃんからお兄ちゃんを。

あの化け物から、お兄ちゃんを。

第3話 春夜の秘密

俺は十六夜 春夜

クラスの奴からは信じられないほどノリのいいやつとか言われてる

友達結構多いほうだと思う

言うなれば陽キャってやつだろうか

その中でも一番仲がいいやつがいるんだけど明日見 綜壺って言うんだ

そいつには二つ上の姉ちゃんと一つ下の妹がいるんだ

あいつの家に一回だけ行ったことがあるんだけど、姉はおっとりとしていて誰にでも

優しく接してくれるような人だった

妹ちゃんは見ただけ感じが強くて結構キツイ子に見えたけど姉と仲良くしてるあたり優しくはあるんだと思う（綜壺への悪口は絶えなかったけど）

親がいなかったもんだから綜壺に聞いてみたらなんて帰ってきたと思う？

ここではそれは話せないなんて言うんだよ

そんな時は分かんなかったんだけど多分いないんだろうなとは思った

それでもこいつの家族は幸せに暮らせてるんだろうなとも思えた

でもその考えは全く違ったみたいだった

そのあとの話になるんだけどな

綜壺が教室に忘れ物したっていうんでその場で待ってただけだな

ふと周りを見渡してたらあいつの姉ちゃんがいたんだ

挨拶しようと思って近くに رفتら聞こえてきたんだ

それはぼそつとつぶやくように言った言葉だった

『恋楓ちゃんは邪魔ね』

恋楓ちゃんって誰だ？と思ったただけであまり気に止めなかった

でもそこで疑問に思った

邪魔ってなんのことなんだろう？と

あんなに誰にでも優しく振る舞うようなあいつの姉ちゃんが暗い顔で誰かのことを

邪魔って言うってたんだ

何かあるなと思ひ少し離れて後から尾行することにした

綜壺のことだ

メールで用事ができたとしても打つとけば何とかなるだろう

こんなことをしようと思わなけりやよかったって今は思う

その後あいつの姉ちゃんを尾行し続けた

15分ほどたった頃だろうか

綜巻の自宅と真反対の道を進んでいることに気がついた

なぜなのかますます気になってしまった

5分ほど経つと大きな車道に出た

どうやら目的地に着いたようだった

姉が向かっていた先はホームセンターだったらしい

何を買うつもりなのか気になり中に入ってみた

そこで姉が手に取ったのは

あまり長くはないロープとノコギリ、そして園芸などに使われるようなタイプの軍手
だった

軍手は分かるのだがなぜロープとのこぎりを買う必要があったんだろう

あいつの家には木は生えてなんかなかったし姉ちゃん本人もDIYなどは怖くてで
きないなんて言ってたからのこぎりとかの危ないものは触ろうとはしないはずなの
に……

そんなことを考えていると姉ちゃんは会計を済ませたらしく店を出ていくところ
だった

モヤモヤは少し残ったけど気にしてても仕方が無いのでその日は大人しく家に帰っ

た

次の日、学校で綜壺と雑談をしていた時のことだった

何となく昨日あったことを話してみた

綜壺「姉ちゃんがのこぎりを買ってた…か」

春夜「ああ、あとロープと軍手も買ってた」

綜壺「そういえば昨日夜中ぐらいに姉ちゃん部屋の部屋から物音が聞こえたなあ　なんか

こう縄で何かを縛る音みたいな　寝ぼけてたからよくわかんなかったけど」

綜壺「そういえばいつもは起こしに来てた恋楓も今日は来なかったんだよな　てか一

度も見かけなかったなあ…」

そこで思った

そういえば昨日…こいつの姉ちゃんが恋楓って言うてようなあ…

春夜「そういえばその恋楓って誰だ？」

綜壺「？妹だけ…話さなかったか？」

妹？あの姉ちゃん妹が邪魔だかって言ってたのか？

確かにあの妹ちゃん扱いが難しそうではあったけどなあ…

あの姉ちゃんに限ってそれはないと思うが…

春夜「お前の姉ちゃんってさ」

綜壺「うん？」

春夜「妹ちゃんとかに對しての態度ってどんな感じなの？」

綜壺「？普通に優しく接してくれてるけど…」

えっ…？

なのに邪魔なんて…

おかしくないか？

まだ裏の顔とかがあるならわかる

でもあの姉ちゃんはそのような人には見えなかったし…

そんなことを考えているうちに休み時間が終わってしまった

途中で話を終えてしまったからすぐ後味が悪いような感じがした

こんなのはまだ序の口だった

この疑問はこの後確信に変わった

もつと酷かったのはこの後だった

それについてはまた次に話そうと思う

これ以上のは結構きついやつだからな

第3話「完」

第4話 僕と家族

前にも話したかな？

僕達には親がない

：

って言っても別に気にしてはいないんだけどね

と言うかあまりに唐突なこと過ぎたせいか感覚が麻痺してるだけかもしれないけど
話がそれちやつたね：

それで、僕達に親がないのには訳があつてね

その：： なんて言うのかな：： 事故：： っていうのが一番いいのかな？

まあその時の話でもしようかな

～8年前～

聡壺「え！明日いつしよに出掛けるの!？」

父「ああ、明日はお父さんもお母さんも休みだからね、せっかくだから家族みんなで
出かけたと思うんだ」

聡壺「やったあ！久しぶりにみんなでお出かけだ〜！」

恋楓 「みんなでお出かけできるのすっごい嬉しい！」

優子 「これからくそんなに騒いだら危ないよ？」

聡壺 「そういうお姉ちゃんだつて嬉しそうじゃん！」

優子 「えへへバレちゃった！」

母 「ふふっほんとにこの子達仲がいいわね」

父 「きつと俺とお前を見て育つたからだな！」

母 「もう！お父さんつたら！」

恋楓 「あつ！そういえば、お出掛けつてどこに行くつもりなの？」

父 「うーん、そうだなあ……」

恋楓 「えー！決めてなかったのー？」

聡壺 「はいっ！はいっ！ぼく水族館行きたい！」

恋楓 「私も行きたい！お魚さんいっぱい見れるから！」

父 「水族館かあ……行くの何年ぶりになるんだろうな？」

母 「確か……新婚旅行で行つたきりよねえ……」

父 「……よし、いくか！水族館！」

…… こうして僕は家族揃つて水族館へ出かけることになつた

そして当日、思いもよらない事が起きたんだ……

く水族館く

恋楓「わあく……すごい綺麗……」

聡壺「あつちで大きな魚が泳いでる！すごいねお姉ちゃん！」

優子「ふふつ、そうね……こうやってぼくってぼくってしながら見るのがいいのよね……」

母「結婚したての頃を思い出すわね……」

父「ああ……こんなに時間が経つのが早いとは思わなかったな……」

聡壺「お父さん！お腹減った！」

父「おつ、確かに言われてみればそうだなあ……よし！ご飯食べに行こうか！」

母「確かあそこをまっすぐ行ったらお土産ショップとフードコートがあつたはずよ」

聡壺「それじゃあ食べに、ゴー！」

く水族館 フードコートく

聡壺「ほいひいね！」

優子「食べ物をお口に入れながら喋っちゃダメよ？ほらこぼしちゃった……」

父「ホントに優子は世話焼きだな！」

優子「なんかこの子達見ると放つて置けなくてね……特にそうちゃんはね……」

聡壺「？僕がどうかしたの？」

優子「あつ、何も無いわよ？」

母「でも優子が居てくれるおかげでお母さん達とっても助かるわあ……」

父「お父さん達ただだと手に負えなくなっちゃうからなく……」

優子「ふふっ、ありがと」

父「ふう……そろそろ行くか？」

母「そうね……結構長いことここにいたものね」

父「？ちよつと待て……どこからクラクションみたいな音が聞こえたような……」

優子、母「……？」

父「あの車……こっちに向かって来てないか？」

母「言われてみれば……」

優子「まずいんじゃない!?早く逃げた方が……」

父「ああ……そうだな……聡壺、恋楓、早く行こう」

聡壺「？うん、分かった」

恋楓「あ！お兄ちゃん待って〜！」コテッ

父「急げ！危ない！」

恋楓「……え？」

その瞬間、お父さんが恋楓と僕を姉ちゃんのところにまで投げたかと思うと次の瞬

間、窓ガラスが割れる音がして、車がすごい勢いでフードコートに入ってきて、丁度少し前まで自分たちが食事していた席の所を突っ切って奥の柱に激突したのが見えた
……

聡彦「……お父……さん……？」

優子「きやあああああああああああああ!!!」

恋楓と僕を助けてくれたお父さんは突っ込んできた車に轢かれてしまっていた

母「嘘……さつきまで一緒にしゃべってたじゃない……お昼ご飯を食べながら……
たくさん笑いあつて……いや……いやよ………こんなの嫌………いやああああああ!!!」

その後、どれくらいの間時間が経ったか、警察と救急隊員が来て水族館は一時立ち入り禁止になった

お父さんの亡骸は回収されたけど、人には見せられないような状態だったそうだが僕達はしばらくの間その事実を受け止めきれず、悲しみに明け暮れていた

そんなことがあつてから一週間後、お母さんがショックとストレスのあまりか酷い熱を出して寝込んでしまった

無理もなかった

いきなり目の前で愛する人を失ってしまったんだ

こうならない方がおかしいんじゃないか、そうも思えた

そうして、1ヶ月もしないうちにお母さんが死んでしまった

原因はストレスを溜め込みすぎたいわば過労死のようだった

その後は親戚が葬式を開いてくれた

みんな親の死を悲しんでいた

そんな中僕達3人だけは泣こうにも泣けなくてただただ虚無感に襲われていた

そこからだろうか

妹はあまり会話をしないようになり、姉ちゃんはいつも以上に優しくなった

そして時は流れて今に至る

姉ちゃんは大学に合格

僕と妹も無事県立の高校へ入学することが出来た

別にあの頃から僕達の関係は変わっていない

ただ妹が反抗期のせいとか少し僕に対する対応が雑だったり、扱いにくかったりするけ

ど

でもなんだろう

最近の姉ちゃんは本当に様子がおかしい

僕に対しての反応はともかく、妹への当たりがきついような気がするんだ

と言っても別に優しいってところは変わらないし、いつも通りではあると思うんだけど…

まあ、そのうち姉ちゃんに聞いてみることにしよう

第4. 5話くこうなる前は

姉の様子が少しおかしくなる前のことを思い出して
 いつもの優しい姉が作る美味しい料理

ちよつと乱暴だけど面白い話で笑わせてくれる恋楓

でも恋楓は前より乱暴になった気がする……

恋楓が高校生になった日もいつも通り……

く三ヶ月前 朝く

恋楓「おーきーろー！兄貴く！朝だぞく！」

綜壺「ううん…… もう少し…… 寝かせて……」

恋楓「まったく…… 起きろつてば！起きないとく…… ころだぞ！」コチヨコ
 チヨ

綜壺「ちよつ！アハハハッ！分かった！起きる！起きるつてば！」ハアハア……

恋楓「昔から兄貴コチヨコチヨに弱いなく……」チラッ

綜壺「しょうがないだろ、くすぐったいんだから……」ハア……

恋楓「……………ニヒヒツ……………」ワキワキ……………

ドリヤアー!

えっ、わっ!ちよっ!

ドスン!ガタン!

優子「あの子達、ホントはすごく仲がいいのね……………」クスクス……………

優子「あとは仕上げにケチャップを……………」よし!

優子「二人ともく、ごはんできたよく」

今行くく!

ちよっ、押すなよ!

優子「ふふっ、降りてくる前にこれを……………」

そうちゃんへ

新2年生おめでとう!

これからもめげずに頑張つて!

応援してます?

恋楓ちゃんへ

新1年生おめでとう!

分からないことだらけかもしれないけど、そんなときは私にいつでも相談してください！

力になれるよう、お姉ちゃん頑張ります！

優子「二人とも、喜んでくれるかな〜」フフツ

↳登校前 玄関↳

綜壺「準備よし！ほら恋楓、案内してやるから、一緒に行くぞ！」

恋楓「早いつて兄貴！待てつて！」

綜壺「行つてきますす！」

優子「あつ！そうちゃん待つて！」

綜壺「ん？何だマチュツ

優子「いつてらつしやい！」

綜壺「あ、うん…行つてきます…」カアアア…

恋楓「あつ！姉ちゃんズルい！じゃなかった…なに浮かれてんだよ！クソ兄貴！」

ゲシツ

綜壺「痛いって！ホントに蹴りだけは強いんだよなあ…」イテテ…

優子「恋楓ちゃんも！こっち来て！」

ギューー…

優子「はいっ！行ってらっしやい！」

恋楓「何かハグされると恥ずかしいな… まあいいや、行ってきます！」ガチャツ

優子「何だか、幸せだなく…」

く学校 昼休みく

春夜「はあああ…：…：… 綜壺さんよお…：…：… 朝一緒にいたあの女の子は一体誰なん

じやい…：… まさかあ…：…：… 彼女かあ？」

綜壺「いやただの妹だかな？恋人とかじやないかな!?」

春夜「なあんだ…：… ビックリして損したじやねえかよお…：…」ハア…：…

綜壺「いやな？あいつ今年の新一年生でさ…：… 一応つれていってやったほうがいい

かなくなんて思ってたな」

春夜「はあああああああ…：…：… 優男かよお…：…：… まぶしいわあ…：…：…：…

あつ、それはそうとさ…：…」

綜壺「ん？何？」

春夜「今週の日曜お前ん家行っていいか？」

綜壺「別にいいぞ？」

春夜「よし！決まりな！場所わかんねえから教えてくれよ？いつも行く喫茶店で待ち合わせしようぜ！」

綜壺「分かった、片付けとかしとくわ」

春夜「よぉし、遊びまくるぞぉ！」

〃日曜日 自宅前〃

春夜「へえ、ここが綜壺の家かぁ……結構いい家に住んでんだなあ……」

綜壺「とか言つときながらお前の家の方が明らかにデカイだろ！何だよ敷地内にプールのつて！」

春夜「親の趣味でさぁ……夜によくパーティーしてんだよ……まあ中々うるさいからいいことあんま無いんだぜ？こっちはこっちで……よし！そんなことより早く入ろうぜ！」

綜壺「切り替えはやつ！……まあいいや、入って、どうぞ」

春夜「はえ、すつごい大きい……って、言わせんなよ！」

綜壺「いや何をだよ！」

春夜「お邪魔しまーす！」

あぁ、お友達？

春夜「誰だ？お母さんか？」

ちよつと待つててね！すぐに行くから！

春夜「それにしても声が若いな……姉ちゃんとかか？」

優子「遅れてごめんなさいね！ちよつとお掃除してたものだから……私、そうちゃん
の姉の明日見 優子つていいいます！よろしくね？」

春夜「……………よ、よろしくつす……………」

春夜（おい！お前の姉ちゃんめっちゃ可愛いじゃねえかよ！超タイプなんだけど！）
ボソボソ……

綜壺（いやそんなこと言われてもなあ……）

優子「？どうしたの？二人揃って後ろ向いたりなんかして……………」

春夜「あつ、あの！優子さんの事！好きです！はい！」

優子「あああああ、ありがとう？でも、もう少し大きくなってから……ね？」

春夜「はっ、はいいいいい！」ズキユウウン！

綜壺（あつ、今心が射ぬかれた音がした気がする……春夜絶対落ちたな……）

優子「さ、上がって上がって！ゆっくりしていつてね！」

くりびんぐく

綜壺「また負けたあ！それにしても春ちゃん、格ゲーだけは強いよなあ」

春夜「うお急に中学のときの呼び名を……まあ伊達に昔からやってないからな！」

優子「クッキー焼いたんだけど、二人とも食べる？」

綜壺「お、センキ「食べたいっす！」

優子「うふふ、召し上がれ！」

綜壺「いやあ……やっぱ姉ちゃん調理師免許取ったらパティシエになれるよ絶対」

春夜「そう思うくらい美味しいんだよなあ……ホントに……サクサク……何枚で

も……サクサク……行けるよな……サクサク……」

綜壺「ちよっ！俺の分まで食べたろ今！」

優子「いいお友達ができて良かったわね、そうちゃん？」

ガチャツ

恋楓「ただいま……って誰？」ビクツ

春夜「あつ！朝の！この子が妹ちゃんかあ！よろしく！俺、十六夜 春夜つてんだ、よ

ろしくな！」

恋楓「よ、よろしく……ってかまさか兄貴に友達がいたとはなあ……ボツチかと

思ってた」

綜壺「なにおう！ちゃんといるわ友達ぐらい！」

恋楓 「へえ？じゃあ何人だよ？」

綜壺 「それは……数えきれないくらいいるわ！」

恋楓 「言ってみろよコラア！」

綜壺 「言うわけねえだろオラア！」

恋楓 「ほう？これをさりたいようだな兄貴は？」ワキワキ……

綜壺 「すいませんでしたあ！いないっす！ほとんどいないっす！」

春夜 「この二人って仲……悪いんすかね？」

優子 「ううん、その逆。この子はね……そうちゃんの事大好きなのよ？ね〜？」

恋楓 「ち、ちげえし！てか、余計なこと言うなあ！」

春夜 「ぶつ、確かに……言われてみれば仲いいっすね……」フフツ

優子 「そうちゃんも多分……同じ気持ち……だって、今まで私たち三人で頑張っ

きたんだもん、仲が悪くなるなんて絶対に嫌！」キツパリ

春夜 「三人で？失礼かもっすけど……親とかって……」

優子 「親……まあそうねえ……いたはいたんだけどね……」

綜壺 「はいストップ！」

春夜 「ビックリしたあ……急に大声出すなよ……」

綜壺 「その話はまた今度……な？姉ちゃんも！そうやってポンポン言わないの！」

優子「あら、ごめんなさいね？昔からの癖で……」

春夜（ああ、多分この三人の親は…… いないんだろうな…… これ以上聞くのはやめ
とこう……）

春夜「いやあ、それにしても今日は楽しかったなあ！姉ちゃんは優しいし、かわいい
妹ちゃんもいて、幸せ者だな！」

綜壺「何かすごい皮肉に聞こえるんだが…… まあ、楽しんでくれて何よりだよ」

春夜「なあなあ！また来週も来ていいか？何か自分の家より居心地が良くてさ……」

優子「ふふつ、いつでもいらっしやいね？その時はいつばいおもてなし、してあげる
から！」

綜壺「まあ、そういうこつた」

優子「あつそうだ！最後に……」

ギュー……

春夜「え？え？いまおれ…… ふあああああつ!?」

優子「ふふつ、また来てね〜」

綜壺「姉ちゃんにハグしてもらえて、気に入られたみたいだな？」ニヤニヤ

春夜「あ、あ、あの！ま、ま、また！来ますっ！はいっ！」フラフラ…… ガチャツ……

綜壺「それにしても、姉ちゃんはスキンシップが過ぎるんじゃないか？春夜だから良

かった、まあ……色んな意味でダメかもだけど……」

優子「なんか家族が増えたみたいで嬉しくなっちゃって……」

恋楓「姉ちゃんのハグって人をダメにするハグだもんなく……いい匂いするし……

母性っていいのか……落ち着くんだよなあ」

綜壺「子供の頃にしかされてなかったからあんま覚えてないなあ……」

優子「今やってあげようか？」フフツ

綜壺「いや別にいいけ」「有無は言わせません！」

ギュー……

綜壺「あーもう姉ちゃん！」カアアア……

綜壺（正直もつとやって欲しかった……ホントにいい匂いするし、胸が柔らかく
て……気持ち良かった……）

恋楓「私にもやってくれよ姉ちゃん！」ワクワク

優子「よおしくし！二人一緒にギューってしてあげる！」

ワイワイガヤガヤ

ここまで恋楓にも優しくかった姉が何故急に冷たくなったのか……

恋楓の性格上怒らせてしまう事はあるかもしれないが、それでもああはならないだろうけどな……

姉が何も変わって無いことを祈るしかないか……

く第4・5話く 完